

現代ウズベク標準語の形成とその普及

浅村 卓生

報告者は、ソ連邦期および独立後のウズベキスタンにおける文化・言語政策を対象として民族意識の形成について研究を進めている。2003年秋から2005年春までの一年半、松下国際財団の松下アジアスカラシップ奨学生としてウズベキスタン共和国科学アカデミー言語学文学研究所に留学し、ソ連邦期および独立後のウズベキスタンにおける言語政策の研究に従事した。

本報告は留学時に入手した一次資料を用い、1920年代から30年代末までの言語政策の経緯について考察したものである。中央アジア国境画定前の時期も含め、ウズベク語に関する正書法は現在までの90年間に七度の正書法改正と三度の表記文字変更を経ている。その中でも、1921-23年の改良アラビア文字の採用と、1929年のラテン文字への切り替え、そして1934年の改良ラテン文字の採用は、当時の文化資本に大きな影響を与える改革であった。また、これらの期間に議論されたのは正書法および使用文字に関することだけではない。ロシア人言語学者ポリヴァーノフは「言語形成の過程において三つの方言の混交という状況であるのは、ソ連邦のチュルク諸語の中でも唯一ウズベク語だけである」と述べているが、多数の方言を抱える共和国の領域内において、どの地方の方言を「ウズベク語」として標準語化するかという問題も大きな課題であった。

1921年の会議では、アラビア文字の改良について討議された。この会議ではバトゥ、ザヒリイらによりトルコ、欧米、日本でのラテン文字使用が例に出され、既にアラビア文字を廃止してラテン文字にすることが主張されている。しかし議題をアラビア文字改良にするかラテン文字導入にするかを採決した結果、アラビア文字改良が選択された。この改良アラビア文字は必要な文字を追加する一方で音価の重複する文字を削減し、母音と子音を分離して表記するというものであった。これは、基本的にアラビア語の文字の字形と数をそのまま保持しながら足りない音を足していくペルシャ語やウルドゥー語などの文字形成のありかたとは一線を画す、イスラーム世界の伝統に反するアラビア文字の使用法である点が注目される。

ここでも方言差をどう処理するかが問題となったが、会議はジャディードのフィトラトが主導権を握り、結果として彼の提案をほぼそのまま採択する形で進められたことから、出身

地の方言の反映よりも文語におけるテュルク語純化を重視し、テュルク世界の共通語を目指す姿勢が明確であった。1923年までに若干の変更が加えられるが、この正書法は1927年まで公式に採用された。また、当該言語が「ウズベク語」と正式に表記されるようになるのはこのころである。教科書等の表題は主にテュルク語などと表記されていたが、「ウズベク語」として単独使用され始めるのは管見では1922年からである。

アラビア文字からラテン文字への移行は、使用するラテン文字の字体や数に差異はあったものの、切り替えそのものはソ連邦内の他共和国と共通している。しかしウズベキスタンの正書法会議の中でも、特に1934年の会議においてウズベク語史上きわめて重要な事項が決定されている。この会議では、それまで「鉄の法則」とされていたウズベク語における母音調和の表記を廃止し、表記されるべき母音の数を九から六に減らすことと、標準語として都市方言が採用されることが決められたのである。ところがその前の1929年の正書法会議においては、言語の標準化に際しての方言の扱いについて地方方言（キプチャク方言、ザラフシャン渓谷方言、ホレズム方言）の採用や都市方言の採用などさまざまな提案がなされていたが、結局母音調和の保持と諸方言を平等に扱う決議が採択されていた。1934年の会議は1929年の決定を完全に覆し、そこで新しく採択された決議が現代に至るウズベク語の特徴を決定付けることになったのである。

この正書法および標準語に関する劇的な変更は、短期間での決定であるだけに非常に不可解な部分を含んでいる。中央からの直接的な指示があった可能性も否定できないが、具体的な証拠がないため立証は難しい。しかし都市方言を重視する1934年の決議の内容は当時ウズベキスタンに滞在しウズベク語の研究をしていたポリヴァーノフの主張とほぼ一致しており、正書法会議の決議録をウズベク語からロシア語に翻訳したのも彼であることから、このポリヴァーノフが会議での決定に一定の影響力を持っていたことは十分に考えられる。またこの決議録を精査すると、正書法はウズベク語の音韻論的・形態論的原則を重視するという宣言とは裏腹に、ロシア語およびヨーロッパ諸語の正書法を踏襲した伝統的原則が多く採用されており、ウズベク語正書法が規範言語としてのロシア語に依存していく体勢が既に当時からうかがえるのである。

1940年にはウズベク語にキリル文字が導入され、その一方でロシア語は規範言語としての地位を徐々に高めた。ウズベク語の正発音法辞典が1970年代まで発行されず、50年代から70年代にかけて断続的に母音調和表記再開を含むさまざまなキリル文字正書法改革案が提起され続けていたことは、規範的なウズベク語の強度が十分培われなかった証左であろう。またそれは現代ウズベク語教授体系の脆弱さの原因でもある。この問題は独立後のラテン文字の導入（1993年）とその改正（1995年）を経て、現代まで継続している。

（東北大学大学院国際文化研究科博士課程）